「帰国子女的心性」について

- 文化差体験が人格形成に及ぼす影響に関する一考察 -

佐々木　麻子

Ⅰ．問題・目的

通常，人は特定の社会・文化的価値観を拠り所に自己を形成するが，そこに異なる価値・文化体系が加わると内的葛藤が生じ個人の内面に様々な変化を引き起こす可能性がある。近年，世界規模で人・物・情報の移動が進み脚光を浴びているが，異文化接触には個人の心理状態を不安定化させる負の側面もあり，異文化接触の個人に対する影響の特性と内訳を解明する必要がある。

異文化接触と人格形成の関連を扱った日本の研究は,「帰国子女」を対象としたものが多い。「帰国子女」は旧文部省が使用を始めた用語だが，1 年以上海外に滞在したこと以外明確な定義はされず，研究者による定義も少しずつ異なる。研究手法の面では，概ね 2 種類に分類できる。

1 つ目は，主に帰国子女受け入れ校に通う児童・生徒や養育者を対象にアンケート調査を実施した量的研究である（小林ら，1978 ; 小林，1980，1981 など)。これは学校現場で帰国子女の適応状況に応じた指導を行う際，1 つの指針を提供した点で意義深い研究である。また量的研究では，海外滞在年数・滞在時年齢・使用言語・学校種別・養育者の滞在国文化に対する態度などの外的要因を心理的葛藤や適応状態を測る指標として用いる傾向がある。特に，言語の問題は，現地語や英語などの新しい言語習得に伴う心理的負担，それと同時に日本語力維持をはかることの難しさ，言語の習得がひいては学習者のアイデンティティ変化へも影響するという視座など，多様な観点から検討され重視されている（江淵，1983 ; 知念，2008 など)。

2 つ目は, 帰国子女の面接調査や手記等で帰国子女の内省を考察する質的研究である (藤原ら，1985 ; 袋岩，1987 ; 小澤，2001 など)。これは個人的な発言や体験を対象にするため，帰国子女「個人」の葛藤や心情を理解する上で有用である。また，異文化接触の長期的な影響を成人後の面接を通して探る必要性を説く研究者が多いのも特徴である。

前者に関しては，帰国子女の一般的傾向の把握に主眼を置くため，個人の実情や研究者が設定した分類基準に対応しない個々の子どもの心性には十分に焦点が当たらなかった。一方，後者に関しては，個別事例を他の帰国子女にも適用する際の客観的な指標を欠く傾向にあった。

上述した一連の研究とやや趣を異にするのは，帰国子女と保護者に面接調査を行い，異文化体験下での子どもの社会化過程のメカニズムを検証した箕浦（1984）の研究である。その中で箕浦は，渡航時年齢・滞在期間・現地人との交友密度などの外的要因を変数とする量的分析と，面接内容の質的分析を組み合わせ行っている。その研究デザイン及び知見は示唆に富むが，箕浦は，異文化体験の法則・原理を見出すことを研究目的としたため，個々人により異なる体験の深さの相違や個別性を粒さに汲み取るものではなかった。重要なことは個々人がいかに「異文化」たる

ものを体験したかなのであり，より主観性に着目することが必要であろう。

また従来の研究では，単一の外国文化と自国文化の接触という二項対立的な枠組みで異文化接触が論じられてきたが，自分の意思と無関係に国内での移動を強いられ，異なる地域文化に接した「転校生」も，帰国子女と類似の経験をした者と捉えることはできないだろうか。転校生を対象に含めると，外国文化と日本文化の接触という枠組みに収まらない文化差の存在が示唆される。

このような観点から筆者は，文化差の体験を重要な出来事として感受し，異質な文化を内在化した個人に共通の何らかの心性が存在すると考える。そして，この心性を「帰国子女的心性」と名付け，その特性と構成要素の詳細を研究する。これは，帰国子女と転校生を手掛かりに，異文化接触と人格形成の関係を考察することが，人間に共通する一般的心性を捉えることに繋がると考えるからである。なお「異文化体験」という用語には，恰も均一な体験であるかの様なイメージが喚起される懸念があるため，本論文ではこれに代わる用語として「文化差体験」を用い，「国内外を問わず，土地の移動に伴い，言語・生活環境等の文化的な差を体験すること」と定義する。

以上を踏まえ，本論文は，主な調査対象を「帰国子女」と「国内での転居・転校経験者（以下，転校経験者と略記）」とし，両者に特有の心性・人格特性の有無を検討し，両者の相違点と共通点を見出すことを目的とする。なお，本人の記憶があり人格形成に影響の強い時期にあたる 4〜16 歳の期間に 1 年以上海外に滞在し，日本に帰国した者を「帰国子女」とした。現在の文部科学省は「帰国児童生徒」の呼称を採用し，「帰国生」の表現も広まってきたが，本論は社会人も調査対象に含むため，通称としても用いられ，対象をより広く捉え得る「帰国子女」の呼称を採用した。また，文化差体験を重要な出来事と感受したか等の個人の主観を重視する観点から，外的要因による対象者選択条件は最小限に止め，公的基準として下限である 1 年以上とした。さらに，文化差体験者の対照群として，日本国内で育ち土地の移動経験のない者を「一般群」として設定した。

また量的・質的研究を組み合わせることで，対象の集団的特性・個人的特性の両方を含めた考察が可能になるよう，質問紙調査（第一調査）と面接調査（第二調査）を組み合わせて実施した。

Ⅱ．第一調査

（1）目的

「帰国子女的心性」の特性及び構成要素の詳細を考察することを目的に質問紙調査を行った。帰国子女及び転校経験者に特有の心性の有無を検討し相違点・共通点を見出すことも目的とした。

（2）方法

実施時期　X 年 7 月下旬から 12 月上旬。**協力者**　D 大学生・院生 104 名（男性 52 名，女性 52 名），その他の大学生・院生 63 名，同年代の社会人 21 名の計 188 名。内訳は，「帰国子女群（以下，帰国群）」56 名（男性 22 名，女性 34 名，平均年齢 23.8 歳，SD=2.91，在外平均年数 5.5 年。最短例は 11 歳時に 1 年半海外滞在した 22 歳の協力者。欧米，アジア，中東，アフリカ等，各協力者の滞在国は多様であった），「転校経験者群（以下，転校群）」30 名（男性 13 名，女性 17 名，平均年齢 20.9 歳，SD=1.53。全協力者が遠隔地への移動を伴う転校を経験），「一般群」102 名（男性 53 名，女性 49 名，平均年齢 20.9 歳，SD=1.72）であった。

手続き　質問紙を D 大学構内で無作為に配布し，後日指定のポストに入れる形式とした。無記名で，年齢・性別のみ記入してもらい，面接調査にも協力可能な人には，最後に名前と連絡先の記入を求めた。その他の大学生・社会人は知人を介して連絡し，個別に郵送し回収した。

質問紙は調査1・2・3から成る3部構成で，回答には統計的処理を施しプライバシーを遵守する旨明記した。調査1は，「帰国子女的心性」を測るための自作尺度（全38項目。カウンターバランスを図った）に5段階で評定を求めた。調査2は20項目の自作のSCT（文章完成法）に記入してもらい，調査3は「親の移動に伴う海外経験の有無」・「親の移動に伴う転校・転居経験の有無」について各々，滞在国（地域）・滞在期間・その経験に関する感想を記述してもらった。

調査1の自作尺度は，帰国子女に関する文献と帰国子女の手記で頻出した内容を参照し作成した。その際，帰国子女の心性と文化差体験に伴う心性をバランス良く表す尺度となるよう留意した。調査2のSCTの刺激文は，自作尺度と同様の手順で作成し，自作尺度の回答結果をより深く理解することを目的にした。また，後日同一協力者に面接をする際の質問設定の参考にした。作成した刺激文は以下の通りである。1．私の居場所は／2．日本は／3．出会い／4．留学は／5．居心地／6．海外で私は／7．言葉は／8．私はいつも／9．私が思い出すのは／10．私がひそかに／11．別れ／12．将来／13．満足感／14．私の信念／15．安心／16～20．私は／

（3）結果

自作尺度の評定値は，「とてもよくあてはまる・5点」から「全くあてはまらない・1点」までの5段階評定とし，各項目について得点化した。逆転項目は評定値を反対にし得点化した。そして得られたデータを用いて因子分析（主因子法，スクリープロットにより因子数を決定，プロマックス回転）を行った。各項目のうち因子負荷が0.35に満たなかった8項目を削除し，再度同様の手順で因子分析をした。因子数は解釈の可能性を考慮し6因子とした。プロマックス回転を行った結果の因子パターンを表1に，因子間相関は表2に示した。第1因子は「楽観的な気分の時と悲観的な気分の時が頻繁に入れ替わる」，「「自分はこれで良いのか」と考え不安になることがある」など，不安や自己認識の不確実感を伴う項目を含むため「不確実因子」と名付けた。第2因子は「私は常に，物事を複数の視点に立ってみる」，「自分の中にもう一人の自分がいるように感じる」など，多面的視点や自己認識を示す項目を含み，「多面性因子」とした。第3因子は「人と心底分かり合えることはないと思う」，「私の本音は人に理解してもらえないと思う」など他者に多くを期待せず，積極的な関わりを求めない項目を含むため「孤立感因子」とした。第4因子は「私は今の居場所に満足している（逆転項目）」などの不満に関する項目を含み，「不満足因子」とした。第5因子は「私には拠り所になる場所がある（逆転項目）」，「自分らしさは日本では出せないと思う」など日本に対する違和感に関する項目のため，「対日違和感因子」とした。第6因子は「人にどう思われようと，自分の個性を大切にする」などの，自己を価値判断の基準にして尊重する内容の項目を含むため「自己尊重因子」と名付けた。各因子得点が高い程当該因子の特徴が強くなるよう（正比例），因子内で負の値を示した項目は，全協力者の数値を逆転させた。

抽出された6因子それぞれの因子得点を算出し，各因子の平均値を従属変数，経験の有無（帰国子女経験・転居及び転校経験・一般群の3条件）を独立変数とする被検者間1要因の分散分析を行った。各因子の平均値及び標準偏差を表3に示した。分散分析の結果，「不確実因子」，「不満足因子」では経験の有無の効果が有意でなかった。「多面性」，「孤立感」，「対日違和感」，「自己尊重」の4因子では経験の有無の効果が有意であった（$F(2,185)=14.14, p<.001$；$F(2,185)=12.16, p<.001$；$F(2,185)=6.03, p<.003$；$F(2,185)=4.46, p<.01$）。そこで4因子にテューキーの*HSD*法による多重比較を行い，その結果を表4に示した。「多面性因子」において帰国群と転校群，および帰国群

と一般群の平均値の間に有意な差が認められ帰国群が高かった（p <.001；p <.001）。「孤立感因子」では転校群の平均値が帰国群よりも有意に高く（p <.002），一般群の平均値が帰国群よりも有意に高かった（p <.001）。「対日違和感因子」では帰国群の平均値が一般群よりも有意に高かった（p <.002）。「自己尊重因子」では帰国群の平均値が転校群よりも有意に高かった（p <.01）。

SCT の結果は，他の調査結果との関連で重要と判断したものに限り，考察で取りあげた。

表 1
各質問項目（8項目を省いた）における因子負荷量（主因子法、プロマックス回転後）

項目	因子1 不確実因子	因子2 多面性因子	因子3 孤立感因子	因子4 不満足因子	因子5 対日違和感因子	因子6 自己尊重因子
楽観的な気分の時と悲観的な気分の時が頻繁に入れ替わる。	**.72**	.06	−.11	.03	−.04	−.10
私は孤独を感じることがない。（逆転項目）	**.69**	−.06	−.15	−.13	.10	−.03
「自分はこれで良いのか」と考え不安になることがある。	**.68**	.02	.02	.05	.02	.06
人と一緒にいる時に寂しさを感じる。	**.49**	.10	.08	.08	.08	−.07
私は自分の性格が時々わからなくなる。	**.46**	−.06	.00	.08	.10	.06
私は常に、物事を複数の視点に立ってみる。	−.04	**.63**	.18	−.14	−.03	.01
いつも自分を客観的に見ている自分がいる。	.12	**.62**	.26	−.16	−.06	.09
誰とでも気さくに話せる。	−.11	**.55**	−.10	−.15	−.01	−.01
人生観が変わるほどの別れを体験したことがある。	.04	**.53**	.06	.09	−.04	−.18
自分の人生を決定づけた体験がある。	.03	**.47**	−.10	−.13	.00	−.09
自分の中にもう一人の自分がいるように感じる。	.32	**.43**	.07	−.01	.18	−.07
人と心底分かり合えることはないと思う。	−.01	.09	**.71**	.03	.13	.06
私の本音は人に理解してもらえないと思う。	.06	.15	**.61**	.15	.11	.07
外国には行きたくない。（逆転項目）	.05	−.10	**−.57**	.07	.39	.06
私は社会のために役立つことをしたい。	.14	.00	**−.44**	.01	−.01	.16
私は一人でいる方が気楽だ。	.07	−.06	**.36**	.31	−.05	.31
私は今の居場所に満足している。（逆転項目）	−.07	−.08	.09	**.83**	.03	−.03
私は今の自分に満足している。（逆転項目）	.14	−.23	.01	**.78**	−.08	.06
自分で決めたことなら、失敗しても納得できる。	−.03	.12	−.01	**−.49**	.08	.38
私には拠り所になる場所がある。（逆転項目）	.02	−.35	.24	−.15	**.59**	−.10
自分らしさは日本では出せないと思う。	−.03	.14	.02	.19	**.56**	−.07
自分には帰る場所がある。（逆転項目）	.00	−.26	.29	−.08	**.52**	−.10
私は、日本語ではうまく感情を表現できないと感じる。	.15	−.06	−.04	−.15	**.43**	.14
海外こそ自分の生きる場所だと思う。	−.16	.29	−.30	.35	**.43**	.04
日本に息苦しさを感じる。	.14	.25	−.01	.08	**.42**	.08
自分の問題は自分で解決したい。	.02	−.20	.14	.10	−.06	**.65**
人にどう思われようと、自分の個性を大切にする。	−.24	.11	.08	−.04	.20	**.49**
やらないで後悔するよりも、やって後悔する方を好む。	.03	−.10	−.24	−.18	.09	**.48**
私には譲れない信念がある。	−.03	.24	−.05	.09	−.09	**.44**
私は自分に正直に生きたい。	.10	−.11	−.37	−.04	.04	**.43**

表2
因子相関行列

因子	不確実因子	多面性因子	孤立感因子	不満足因子	対日違和感因子	自己尊重因子
不確実因子	1	0.04	0.28	0.36	0.27	−0.11
多面性因子	0.04	1	−0.26	0.24	0.26	0.43
孤立感因子	0.28	−0.26	1	0.18	0.09	−0.11
不満足因子	0.36	0.24	0.18	1	0.51	0.04
対日違和感因子	0.27	0.26	0.09	0.51	1	−0.01
自己尊重因子	−0.11	0.43	−0.11	0.04	−0.01	1

表 3
各群における各因子得点の平均値および標準偏差

	帰国群（n=56）		転校群（n=30）		一般群（n=102）	
因子（項目数）	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
不確実因子（5）	−0.160	0.986	0.230	0.829	0.020	0.865
多面性因子（6）	0.499	0.873	−0.295	0.908	−0.187	0.806
孤立感因子（5）	−0.469	0.785	0.192	0.739	0.201	0.911
不満足因子（3）	0.064	1.010	0.092	0.976	−0.062	0.856
対日違和感因子（6）	0.324	0.827	0.008	0.959	−0.180	0.871
自己尊重因子（5）	0.227	0.844	−0.336	0.754	−0.026	0.868

表4
各因子における多重比較（テューキーの*HSD*法）

		平均値の差（I−J）					
(I) 経験	(J)経験	不確実因子	多面性因子	孤立感因子	不満足因子	対日違和感因子	自己尊重因子
帰国群	転校群	−0.39	0.79***	−0.66	−0.03	0.32	0.56*
	一般群	−0.18	0.69***	−0.67	0.13	0.50**	0.25
転校群	帰国群	0.39	−0.79	0.66**	0.03	−0.32	−0.56
	一般群	0.21	−0.11	−0.01	0.15	0.19	−0.31
一般群	帰国群	0.18	−0.69	0.67***	−0.13	−0.50	−0.25
	転校群	−0.21	0.11	0.01	−0.15	−0.19	0.31

*P<.01　**P<.002　***P<.001

（4）考察

「帰国子女的心性」は，「不確実」・「多面性」・「孤立感」・「不満足」・「対日違和感」・「自己尊重」の6因子で構成された。以下，各因子の特徴と帰国群，転校群，一般群との関連を考察する。

「不確実因子」は，自己概念が定まらず情緒が不安定な状態を表した項目から成る。群間に有意な差が見られなかった理由は，協力者の年齢に関係があると考える。本調査の協力者は青年期後期に該当し，自己を模索し自己評価が揺り動かされる過程にあると言える。よって文化差体験の度合いを問わず，協力者に共通して表れたと考えられる。

「多面性因子」は帰国群と転校群，帰国群と一般群の間で有意な差があり，帰国群が高い値を示した。当該因子は事物や自己を一面的に捉えずに，多面的・相対的に認識する傾向を示す因子である。また「自分の人生を決定づけた体験がある」などの項目を含むことから，重大な出来事の体験との関連で形成された多面性と考えられる。帰国子女は海外および帰国後の体験を人生の重大な転機と位置づけ，両体験を通じて，土地や地域に住む人ごとに生活様式・価値観が変わることを知る。多様な価値観を目の当たりにして育つことで，自身の中にも多面性を形成していくと想定される。滞在国で常識とされた行動や価値観が，帰国後は通用せず，周囲から疎まれる事態を経験し，多くの場合混乱し葛藤する。拠り所となる価値観が揺れ動く体験を重ねるうちに，物事の良い面と悪い面を見出し，その上で自己の判断を拠り所にする姿勢が身につくのであろう。国内の移動でも，方言や県民性の違いなど価値観の混乱を招く要素はあるが，日本語・日本人という共通性は大筋で維持される。このため，滞在国では自己主張が尊ばれるが，日本では和を乱すとして疎まれるなどの正反対の価値観にさらされて，両者の間で強く揺さぶられることは少ないのであろう。これが，転校群と一般群の平均値に有意な差が表れなかった理由と考えられる。

「孤立感因子」では，転校群の平均値と一般群の平均値に有意な差はなく，帰国群のみ有意に低かった。当該因子は他者に多くを期待しない心性と「私は社会のために役立つことをしたい（負の相関のため「役立つことをしたいと思わない」と解釈した）」という社会貢献への消極性が含まれる。また「外国には行きたくない（逆転項目）（負の相関のため，全協力者の数値を反転させて逆転を取りはらい，「外国には行きたくない」と解釈した）」は，海外に活動の場を見出すことへの消極性と言えよう。よって当該因子は，人・社会に対して期待せず，自らを閉ざして距離を置くあり方を示すと考えられる。帰国群の平均値が有意に低かったことからは，帰国子女が対人関係や社会的活動に意義を見出し積極的に関わる傾向が，他の二者に比べて強いことが示唆された。この相違の理由を第二調査の結果と合わせて後ほど考察する。

「不満足因子」で群間に有意な差が見られなかったことには，「不確実因子」と同様の解釈ができよう。本調査の協力者は，役割実験などを通じて自己を模索する途上にある。目標や願望を持ち，将来の自己の可能性を追求する過程にあるといえ，協力者に共通して表れたと考えられる。

「対日違和感因子」は帰国群と一般群の間にのみ有意な差が見られた。当該因子は，日本に対する違和感と「私には拠り所になる場所がある（逆転項目）」など帰属意識を持てる場所が希薄な心性を表した因子だと言える。帰国子女は基本的に，日本から海外に移動した時と海外から日本に帰国した時の二度以上，カルチャーショックを味わう。その都度拠り所としていた，又は形成途中の社会・文化的規範が揺らぎ，それに依拠していた自分への疑問が生じ見直しを迫られる。海外にいた時は日本を強く意識し，帰国後は思い描いたものと異なる日本に違和を覚える自分につ

いて考えることになる。そして，日本と海外の社会･文化的規範の両方に疑問を抱くようになるため，一方を絶対視して従うこともできず，拠り所を欠くと考えられる。一般に，異文化に接触することで社会規範･自身の価値観を揺さぶられ，自己を見直す契機になると言われるが（松下，2000），一般群は対日違和を感じる度合いが低いという結果はこの説を支持するものと言えよう。

「自己尊重因子」は，帰国群と転校群の間でのみ有意な差が見られた。当該因子は，自己を基準として物事を判断し尊重する傾向を示した因子と捉え得る。帰国子女が物事の多様性を意識し，価値基準に迷う特性を身につけているとすれば，そのような個人が見出したのが自己の価値観を基準にする生き方であり，自己と直面して答えを自身の中に見つけざるを得なかったと想定される。一方，転校群は価値観の揺らぎを体験した際，自己を価値基準として意識するのではなく，場に馴染むことを優先してきたのではないだろうか。塚本（1990）は，「とりあえず当分続く仲間に所属し」，そこから気の合う友だちを探すという転校生のあり方を捉えており，ここからも自己の志向を後回しにし，場に溶けこむことを優先する転校群の特性が示唆される。帰国群と一般群の間で有意な差が見られなかったのは，自己尊重が形成された背景が両群で異なっていたためと考えられる。各群特有の因子の組み合わせを見ると，帰国群は「多面性」･「対日違和感」･「自己尊重」の3因子が高く，一般群は「孤立感因子」が高く「自己尊重因子」は3群の中間の値を示していた。ここから，帰国群の自己尊重は多面性と対日違和感に基づき形成したもので，一般群の自己尊重は孤立感に基づくという可能性が示唆された。当該因子の高い協力者の SCT の結果にも両群で異なる特徴が表れた。特に「私は」は自己概念を把握する上で有効な刺激文であるが，帰国群では「自分の目的が明確にあります。／自分を探している。／心の支えとなる大事な仲間を持っている。」など自己の内面に照らした文章が多かった。一方，一般群では「タマゴ／美しいものは孤立していると思う。／最高にいかしてる」など虚無感の表れか言葉遊びか判別困難な文章があり，自己尊重の中でも自己愛的な傾向が表れた可能性が考えられた。この傾向を示した協力者は「孤立感因子」も高く注目に値したが，特定には慎重な検討が必要である。

Ⅲ．第二調査

（1）目的

帰国子女と転校経験者に面接を行い，事例に即して文化差体験の個人における意味合いを理解することを目的とした。また，文化差体験の個人差と共通性を見出すことも目的とした。

（2）方法

実施時期・場所　X年9月下旬から12月上旬。所要時間は約1時間で，D大学の面接室を使用したが，遠方在住者には，静かな飲食店等協力者指定の場所で行った。**協力者**　第一調査協力者の内，面接への協力意思を示した「帰国群」13名（男性5名，女性8名，平均年齢24.2歳，SD=2.88），「転校群」7名（男性3名，女性4名，平均年齢21.4歳，SD=1.13）の計20名に行った。

手続き　面接は半構造化面接法で面接者1名（筆者）と面接協力者1名による個人面接法で行われた。質問は全協力者に共通の20項目と質問紙の結果に基づき各協力者専用に設けた5項目の計25項目で構成した。事前に「答えたくない質問には答えなくて良いこと」，「協力者はいつでも面接を中止出来ること」を伝え，了承を得てボイスレコーダーに録音しながら内容を記録した。

（3）結果

面接と第一調査の因子得点の結果から総合的に判断し，文化差体験の典型を示すとみなされた，

帰国子女２名・転校経験者１名の計３事例を以下にまとめた。事例１の協力者（以下，A と略記）は，「対日違和感」を除く各因子得点が，帰国群の平均値を大きく上回り，帰国群の特性を濃厚に有した。事例２の協力者（以下，B と略記）は，「孤立感因子」が帰国群の平均に比し高いが，残りの５因子は最も帰国群の平均値に近く，帰国群の平均像に近いといえた。事例３の協力者（以下，C と略記）は，転校経験者の中で，最も帰国群の平均に近い値を示したこと，また「孤立感因子」の値が平均より高いことから，B との比較を通して，文化差体験の個人差と共通性をより鮮明に捉えられると考えた。なお，「　」内は協力者の発言の引用で（　）内は筆者が加筆した。

事例１　A は 26 歳の男性会社員で，国内で２度の転居後 10～15 歳を英語圏の E 国に滞在した。

親の海外勤務に伴い移動するのが当然と思い，E 国に行った。E 国では地元の公立小学校に通い，ESL（外国人や移民の子どもを対象に行う英語の授業）を早く修了するよう親や日本人コミュニティから暗黙のプレッシャーがあったが意義を見出せず学ばなかった。中学で現地の親友を得たのを契機に英語を最も多く学び，「典型的な E 国人生活を満喫した」ことが印象に残っている。また，学校長と交渉の末 ESL を止めたことで，意思表示により現状を打開できると知った。

帰国時期が未定な中で自らの意思で帰国子女受け入れ高校を受験し合格した。A は，「友達とか全部を後ろ髪引かれる思いで置いてきた国だから」帰国を楽しみにしていたという。生徒の 2/3 が帰国子女である高校に違和感はなかったが，年齢による上下関係が厳しい寮生活や部活動は過酷で疑問を感じた。自分の高校レベルの英語に対する劣等感の克服と学業を目的に，大学時に F 国へ留学した。そこでの交流を通じて英語への劣等感は解消し，現在の職業選択に影響した。

多くの E 国帰りの帰国子女は E 国に誇りと優越感を持つが，大学進学後はそれが経験・知識不足による偏った見方であると気付く。A も異質な人・文化を受け入れる E 国を尊敬するが，その政治的背景には違和感があるという。また A は，海外生活がなければ今と違う自分になっていたという。10 歳で強制的に E 国へ行き英語を学ばなければ，本来語学が苦手な A は英語が必須の現在の仕事に就いておらず，海外経験が結果的に可能性を広げたという。また海外の視点から日本を見ることができ，日本と海外の両方に興味を持つ契機となった。小学 5・6 年時は日本へ，高校の部活動が辛い時期は E 国への帰国を望み，苦境に陥るほど逃げたくなったが，現在は辛くても特定の場所に帰りたい感覚はない。A は日本・海外でも違和感はなく，人は目的意識を持ち打ち込む物があれば，それが自分の居場所に繋がり，安定を得られるという。つまり最終的に土地や国ではなく個人の目的意識こそが違和感を左右するのだという。だが海外に住み，辛い時期に E 国に帰りたいと思ったからこそそう思うのかもしれないとも述べた。現在は，海外での在住経験により自己認識や価値観が自分の内面で対立することはなく，常に自分は自分だと感じる。

また高校３年時に日本人に自分の E 国人らしさを指摘されたが E 国人から見たら明らかに E 国人でない自己像に葛藤したという。葛藤の末，自分は E 国人・日本人という概念では測れず，ミックスされた状態こそが自分であると気付き，それ以来，悩む必要は無いと思った。その際，同じ悩みを持つ他の帰国子女と話せたことの意義も大きかったという。

事例２　B は 24 歳の女子大学生で 8～11 歳を英語圏の G，11～13 歳を中東の H 国に滞在した。

B は小学２年で親の海外勤務に伴い G 国に移動した。現地で公立小学校に通うが１年目は英語を話せず，日本語を話すとからかわれるため黙って過ごした。２年目にいじめっ子に対し初めて英語で反撃し，相手が衝撃を受けた瞬間が転機となった。文法が分からずとも感情に合う単語を

使えば伝わるのを実感し，以後，学校での立場や友人関係が改善した。3年目にH国への移動が決まり，上達した英語を使う機会がなくなることが残念だった。H 国には日本人学校しかなく，「(G 国との）感覚の違いを感じた。自分自身の俗に言う帰国子女っぽさを痛感し，自分は日本の学校に行くとこういう感じで浮くのだ。」と気付いた。厳しい宗教上の戒律を守るH国の常識に驚いた。学校で愛国心を植え付けられたためG国の正義を疑うことはなかったが，G国に敵対する側にも相応の見解があることをH国で知り，公平な見方を築くことができたと語った。

日本への帰国当初は，治安が良く服装や食物が自由になり嬉しい反面，それを当たり前に享受する日本人に疑問を感じた。帰国子女が珍しい中学校に転入したが，女子全体で仲の良いグループが形成されていたため，自動的に仲間に入れてもらえ，すぐ馴染めた。だが英語の発音が目立たぬよう気を使った。その後成績競争に関心が向き，G国やH国への帰国は望まなかった。

持続した友人関係はなく「人とは区切りを入れて付き合っていくもの」という意識が強くある反面，海外移動のお陰で再会しても区切った時点からやり直せるという利点も感じる。親は，海外生活によってBが人間関係を断絶した潜在記憶を持つために人間関係を切る癖がついたのだと懸念するが，本人は，この性向は今では自分の判断であり，特に問題を感じないという。

海外生活がなければ，今とは全く違う自分になっていたと思う。Bは自分の英語力や学力全てが帰国子女・海外生活に還元されるため，努力が正当に評価されず悔しいという。だが海外生活を悔やむことはなく，自分で選び受験した高校を卒業し，人生を選び直した自信と実感を持てたことが人生の転機ではないかという。一カ所の滞在期間が6年以上になると，生活には慣れるが水が澱むような息苦しさを感じるため移動する。流浪の民のような寂しさを感じる時もあるが，家族のいる場所こそが居場所であり，自分を見失わず保てるという。自分の中に複数の考えが同時に浮かび，時折もう1人の自分がいると感じるが，異なる意見は両立することなく，中立的視点で自分を監督席から見る様で，極端な思考や行動を制御するのに便利だという。「どこに行っても大丈夫だ，的な人が自分の中に1人か2人いて，その人のことを信用して」次に進むという。

事例3　Cは21歳の女子大学生で，3〜7歳をI県，7〜18歳をJ県で生活した（転校経験者）。

I 県では，ミッション系の幼稚園と小学校に通い，英語や宗教の授業があった。クラスにはハーフの子がおり，皆仲が良く楽しかった。J 県に引っ越すのが辛く，人格形成にとり重要な時期を過ごしたI県には思い入れがある。J 県では，雑誌が発売日に買えたり交通の便が良いことが嬉しかったが，友達との別れは辛かった。小 2 の途中で転入し仲間に入る機会を逸し馴染めず，3 年程 I 県が恋しかった。J 県の方言がうまく使えず“言葉おかしいね”と言われショックだった。小5で友達ができJ県に慣れた後もI県に帰りたい，せめて小学校卒業までI県に居たいと思った。I 県ののんびりした空気，幼稚園・小学校の博愛的な教えが自分の人格形成に影響したと感じる。またハーフの子とその個性をそのまま受容したI県の小学校に比べJ県の小学校には異質な者を受容しない雰囲気を感じ，自分が周囲から変わり者扱いされるのも理解できなかった。

I県からJ県への移動がなければ，今と異なる自分であると思う。I県のままだと温室育ちの部分が残り，社会に出た時に簡単に傷ついたと思う。I県とJ県の間で葛藤を体験し，長い間J県出身と言うことに違和感があった。I県の 4 年間がなければ自分も異質な者に不寛容な人間だったと思うし，I県での体験は重要だった。10 年位前からI県が注目され，I県にいたことを誇りに思えて以来，「両方を過ごした事自体が自分のアイデンティティだと思うようになった。」今で

はＩ県とＪ県の体験は分離しておらず，各々が調和して自分を形成しているという。海外では気楽に過ごせるが，日本が自分の場所ではないとも思わない。地元で育ちそこに住む人に比べると確固たるものがない自分を感じるが，今は身軽で自由という利点も感じている。

帰国子女の面接協力者 13 名はすべて，「海外体験がなければ今とは異なる自分になっていたと思う」と明確に即答した。これに対し転校経験者の半数は「移動経験がなければ異なる自分になっていたと思う」と明言したが，残る半数は「少し違っていたと思う」，「成長の過程と区別して考えるのは難しい」と各々異なる回答であった。

（4）考察

帰国群・転校群の代表的な事例を 3 例挙げたが，各自の文化差体験は多様であった。

Ａは英語を苦労して学ぶよりも，現地の親友とＥ国・学生生活を満喫したことで，英語を自然に習得した。また，交渉の末 ESL を止め，意思に基づく行動が解決に繋がるのを知る。これにより，受動的な学習形態より積極的に人と関わり楽しみを追究する方に価値を見出したといえる。日本に期待し帰国したＡには厳しい上下関係のある寮生活と部活動は辛かったが，逃げずに続けた。また帰国後完全なＥ国人でないのにＥ国的と見られる自分に葛藤するも，内に籠もらず積極的に自分と環境に向き合った。Ａの生き方の基本には，辛い現実や困難に直面しても，逃げずに積極的に関与する姿勢がある。これは，Ｅ国で後の生き方の指針となる原体験ともいえる体験をしたためであり，この姿勢は帰国後も一貫して見られる。帰国子女の友人と悩みを共有し考え合えたことが葛藤に向き合う助けになり，「自分は自分」という明確な自己像を形成したといえる。

ＢはＧ国で，努力して英語を上達させるとともに，日本語の維持にも努めた。受け身から反撃に転じることで友人関係を改善した体験を持ち，Ｇ国とＨ国で善悪は立場により異なることを知る。自分で選んだ高校に入学し卒業したことで，親の都合に振り回されるだけの人生ではないと思えたことが転機になった。人と区切りをつけて付き合い，定期的な移動に寂しさを感じても，自分の選択である限り問題はないと言う。Ｂには，「自分の選択」が大きな意味を持つといえる。Ｂは帰国子女でなければ，英語力や学力向上のための努力が正当に評価され，悔しい思いをせずに済んだと言う。Ｂには海外で得た価値観も大事だったが，それ以上に，言語と学力維持の努力が重要だったのではないだろうか。しかし，それが海外に在住した事実のみに還元されてしまい，努力が正当に評価・理解されないことに悔しさと憤りを感じた。Ｂは海外生活を理由に自分が大切にした努力を否定され，内的連続性を失った。これが，Ｂにとっての文化差体験だったと筆者は考える。この体験により，「自分の努力は他人には分からない」というある種の不信感や他者に多くを期待しない心情を抱き，中学校に同様の悩みを持つ帰国子女がいなかったことも影響し，不信感や憤りに向き合う機会を逸した。そうして友人関係よりも可視的な評価基準である学力に力を注いでいったのだと考えられる。自分の選択である限りこの生き方に問題はないとＢは言うが，自らを「流浪の民」になぞらえたように，その根底には，一つ処に留まり難い浮き草のような不安定さや寂しさがあることを感じさせる。定期的に移動し，人に深く関与せず区切りをつけて付き合うのも，この原体験のためではないだろうか。ＡとＢの人との関わり方の違いは，両者の原体験，つまり文化差体験の違いに基づいて形成されたと言えよう。

ＣはＩ県で培った個性尊重の姿勢・博愛的傾向がＪ県では通用せず，変わり者と見なされる体

験をした。CにとりI県の4年間で吸収した価値観は重要で，“言葉おかしいね”という発言に端的に表れた，異質なものに不寛容なJ県の雰囲気やその排他性に心理的葛藤が生じたと考えられる。価値を見出していた思想・生き方を否定された体験が，Cにとっての文化差体験だったのではないだろうか。Cが再びI県を誇りに思い，両方があってこそ自分だと思うまでに，少なくとも5年の歳月を要したことにも，文化差体験によって抱いた葛藤の深さが表れていると考える。

3名の事例を通じて，文化差体験により直接受けた影響と，体験が内在化され，内的過程に影響を与える側面のあることが判明した。AはE国での文化差体験が考え方の基礎になり，BとCは自分が信じ大切にした価値観を否定されるのが文化差体験だった。BとCの「孤立感」・「対日違和感」因子が高いことも，他者からの否定を伴う文化差体験の影響と深く関連すると筆者は考える。両者は現状について，「問題を感じない」（B），「今は身軽で自由」（C）などと一定の肯定を示した一方，人間関係を切る癖や一定期間後に移動したくなる生き方に「流浪の民」（B）を重ねたり，「地元で育ちそこに住む人に比べると確固たるものがない自分」（C）を感じるなど，寂しさや欠落感を語った。人格形成にとり重要な時期に価値観を否定され，傷つき不信感を抱いたことで，他者との関係や状況の改善に多くを期待しないあり方を身につけたと考えられる。両者の語りに，自身の状態に関する疑問，揺らぎや寂しさが織り込まれていることに鑑みると，達観した人生観に基づく現状肯定というよりは，他者や社会に積極的に働きかけないことで，周囲からの影響を抑えようとする心性が働いて形成したとみなすことができよう。価値観の否定により受けた影響が未消化なまま沈潜し，それが因子の高さとして浮き彫りになったのだと考えられる。

以上見てきたように，文化差体験は文字通りその環境での体験が意味を持つこともあれば，信じるものの否定で生じる心の中の断絶を意味することもある。このため，文化差体験は人や社会との関わり方や人生の歩み方に異なる形で影響を及ぼすのだといえよう。

Ⅳ．総合考察

第一調査では「多面性因子」が帰国群で有意に高かった。面接でも物事や自己認識を多角的・中立的な視点で捉えた発言が多く，多面性の高さが裏付けられた。SCTでは刺激文を問わず，対象の肯定・否定両側面を捉えた文章を書く傾向が顕著に示されたこともこれを支持する結果といえよう。結果を一部挙げると，『「日本は」日常生活が便利な国だが，息詰まることが多い。』『「海外で私は」苦労した。でもその分良いことはあった。』『「言葉は」何も与えないことがあるが，相手の全てを変えることもある。』『「私は」実は人がとても苦手だ。でも人はすき。』などである。小林（2003）が考案したSCT-Bは，刺激文完成後に用紙をめくると，「が」という接続助詞が表れる仕組みになっており，それに続けて被検者が記述した内容から，反応パターンを探るSCTの応用テストである。小林は，反応パターンを〈受容〉〈決意〉〈肯定否定〉などに分類し検討しているが，先に挙げた帰国群のSCT結果は，その〈肯定否定〉に当てはまる。SCT-Bでは，接続助詞を設けることで被検者の二面的感情を操作的に引出したが，自ら接続助詞を用いて事物の肯定・否定両側面を記述した帰国群は，日常的にそのような反応パターンを有しているといえるのではないだろうか。転校群は「多面性因子」の平均値が低く，集団特性としての多面性は顕著に表れなかった。面接を通じて，転校群では文化差体験による影響の個人差が大きいことが示唆されたが，多面性を伺わせる発言が個別面接では示されることもあったことは，この個人差の大きさと関連すると思われる。文化差体験の影響を強く感受し意識した協力者において，多角的に

事物を捉えた発言が多く見出せたことからも，文化差体験と多面性の関連の強さが指摘できよう。

帰国子女と転校経験者に共通したのは，学期途中など区切りの悪い時期の移動は困難を伴い，自己効力感を持ち難いことだった。また，複数の言語・方言の習得や維持の努力，両方を完璧には話せない場合に生じやすい周囲の無理解や心理的負担など，言語体験にまつわる思いが切実に語られており，その影響の大きさが示された。だが，親の都合で移動する思い通りにならない現実の中でも，意思を貫き，進路・職業など何らかの選択をやり直したという思いを得た協力者は，自己の体験を中立的に評価・受容する傾向があり，概して「自己尊重因子」の得点が平均値以上だった。ここから，自らの選択がその後の自己受容を導く重要な契機の一つになると示唆された。

対日違和感に言及した発言を帰国子女全員が述べたが，日本社会・日本人に対する単純な否定感情や滞在国に帰りたいという希望は帰国後３年程で減退する傾向があった。むしろ心情・言語面で「日本人らしさ」が不足し，滞在国で受けた影響を持ちつつも完全にはその滞在国の人になりえない中途半端な自己像に葛藤する。しかし高校・大学を境に，国や土地ではなく，「自分は自分」というように両者を持ち葛藤した自己を受容し，納得することが自己を決定すると感じる。その状態をＡは「ミックスされた自分」と言い，他の協力者は「マーブル模様」と表現した。「自分は自分」と納得した後は，居場所や拠り所を自己や周囲の人間関係の中に見出す傾向もあったが，その後の選択では，安定を見出す者と拠り所を求め転々とする者に別れた。文化差体験が他者への不信感を導いたかなど詳細に検討することで，この相違の契機が理解可能だと示された。

日本の息苦しさに言及した転校経験者はいたが，海外と比較して否定感情を示す者はいなかった。しかしＣは土地の移動に伴う自己概念の葛藤に言及し，確固たる本拠地や拠り所を欠いた。この点において，帰国子女Ｂとの共通性が見出せる。文化差体験者に共通する心性として，「対日違和感因子」の中でも特に，帰るべき場所や拠り所への欠如感に着目する必要があると考えた。

転校群で「孤立感因子」が有意に高く，面接はそれを裏付ける結果であった。移動の結果，持続する友人のいない寂しさや対人関係で緊張するという協力者が複数いた。移動先で馴染む苦労が身に染み環境変化に消極的とも述べた。持続する友人のいない寂しさに言及した帰国子女はいたが，対人関係の緊張や環境変化に消極的との発言はなく，環境に主体的に関与する効力感を体験した帰国子女と，場に合わせることで解決を図る転校群の傾向から，両者の相違は説明し得る。

自己内に二重性を感じた協力者は，帰国子女，転校経験者双方にいたが，２つの思考や感情，各々が交互する感覚はあるものの，最終的には一貫し自己に集約されるという。つまり二重性・多重性を自覚し煩わしさや葛藤を抱えても，それを個性として受容する傾向が示されたのである。本調査は日本語で行われたため，日本語の心理的構造内の自己像に限局し語られた可能性を考慮する必要はある。だが仮にそうだとしても，複数言語環境を経て，日本語環境に在る協力者の現状に即したものといえ，文化差体験者の自己認識の一つのあり方を示唆するのではないだろうか。

「帰国子女的心性」は６因子で構成されるが，特に「多面性」・「対日違和感」・「自己尊重」・「孤立感」の４因子に着目することで，文化差体験者の集団心性がより鮮明に浮かび上がると考えられる。あえて単純化して述べると，帰国子女の集団心性の特徴は「物事を多面的に認識し，日本に違和感を感じ拠り所に欠けるが，自己を価値・行動の指針として尊重し，人・社会に積極的に関与することに意義を見出す」となる。一方，転校経験者は「日本に違和感を感じ拠り所に欠ける傾向があり，人・社会への関与が消極的」となる。だが各自の因子得点では「孤立感」が高い

帰国子女や「対日違和感」の低い転校経験者がおり結果は多様で，どの因子の特徴が顕著になるかは個人差があった。面接と SCT の結果を踏まえ個人差を見ると，帰国子女や転校経験者の心性を理解する鍵が文化差体験であった。つまり，全体的傾向を把握する上で「帰国子女的心性」に着目することは有効だが，どの要素が顕著になり人格を形成するかは，文化差体験が個々人にもたらした意味合いにより異なるのであり，その意味合いを丁寧に掬い取ることが重要といえる。

本研究では，帰国子女のみならず，転校経験者を対象にしたことで，文化差体験者の心性を多角的に理解する端緒を得た。一方，課題も残る。特に転校群の集団特性に関して，更なる検討が必要と考える。例えば，「日本に違和感があるが，海外に親和性を感じることはない」転校群の心性を十分汲み取るために，拠り所を欠く心性を問う項目を増やすなど，尺度の改良をはかりたい。また親子関係の影響を重視する先行研究もあるが，本調査では，親の態度・価値観に言及した協力者は少なく，それも文化差体験への影響と直接関連付けたものではなかったため，この点は今後慎重に検討したい。更に，「帰国子女的心性」の高い一般群の協力者にも面接を行うなど，本研究で新たに生じた疑問点を掘り下げ，人間に共通する一般的な心性をより深く捉えたいと考える。

〈付記〉本論文は京都大学教育学部に提出した卒業論文を加筆修正したものである。論文指導頂きました桑原知子先生，岡田康伸先生，調査にご協力下さいました皆様に深謝いたします。

〈引用文献〉

知念聖美(2008)：二言語で育つ子どものアイデンティティ　佐藤郡衛他編　アメリカで育つ日本の子どもたちーバイリンガルの光と影　明石書店 Pp.172-190.

江淵一公(1983)：異文化で育つとはどういうことか　小林哲也編　異文化に育つ子どもたち　有斐閣 Pp.1-28.

藤原喜悦他(1985)：帰国生の適応過程に関する心理学的研究　東京学芸大学紀要Ⅰ部門　36 Pp.71-81.

袈岩ナオミ(1987)：「海外成長日本人」の適応における内部葛藤　異文化間教育 1 異文化間教育学会アカデミア出版会　Pp.67-80.

小林哲郎(2003)：文章完成法を応用したテスト SCT-B について　京都大学大学院教育学研究科博士論文

小林哲也他(1978)：在外・帰国子女の適応に関する調査報告　京都大学教育学部比較教育研究室

小林哲也(1980)：海外帰国子女の適応　星野命編　カルチャー・ショック　現代のエスプリ　161 至文堂 Pp.83-101.

小林哲也(1981)：海外子女教育・帰国子女教育　有斐閣新書

松下美知子(2000)：異文化体験　久世敏雄・斎藤耕二（監修）青年心理学　福村出版 Pp.283.

箕浦康子(1984)：子供の異文化体験　思索社

小澤理恵子(2001)：異文化間トレランスの〈耐性〉と〈寛容さ〉について　異文化間教育　15 異文化間教育学会アカデミア出版会　Pp.31-52.

塚本美恵子(1990)：新しい環境への適応－適応の概念と転校生の学校適応に関する調査報告(1) 国際基督教大学学報　I-A　教育研究 32　Pp.111-133.

（心理臨床学講座　博士後期課程２回生）

（受稿2009年9月7日、改稿2009年11月30日、受理2009年12月11日）

A Study on ‘ Returnee Student Tendency ’ : About the Effect of Experience of Cultural Differences on the Formation of Personality

SASAKI Asako

This study examines the personality of people who experienced cultural differences and internalized foreign culture by moving to another area or a country. In Study I, the questionnaire consists of 38 items for measuring the personality named “Returnee Student Tendency”, and SCT (Sentence Completion Test) consisted of 20 items. The author composed both. They were given to 3 groups of Japanese university students and workers in their twenties: Returnee Students who had lived abroad for more than one year in their childhood resulting from their parents’ overseas job assignments (N = 56); School Transfer Students, who had experienced school transfers in Japan because of their parents’ job-related moves (N = 30); Traditional Students (N = 102). The results of the factor analysis on 188 items of data totaled 6: insecurity, multiplicity, isolation, dissatisfaction, sense of incongruity with Japan, and self-respect. The results of multiple comparison showed some similarities between the personality peculiar to Returnee Students and to School Transfer Students. In Study II, 13 Returnee Students and 7 School Transfer Students were interviewed. From the results of Study I and Study II, it was considered that the key factor influencing the formation of personalities was the personal meaning of the experience of cultural differences.